

目次：

時間学国際シンポジウム 2015 『眠りの時間学』を開催	1
時間学国際セミナーを開催	2
時間学特別セミナー『時間経済学— 経済学と物理学の狭間で—』 を開催	2
時間学特別セミナー 『世界遺産と社会的記憶』を 開催	3
イタリア国立宇宙物理学研究 所から研究者招へい	3
今後の予定	3
サロン所長室 「能と時間学」後篇	4

時間学国際シンポジウム 2015 『眠りの時間学』を開催

平成 27 年 12 月 19 日（土）、本学吉田キャンパス・人文学部大講義室にて、時間学国際シンポジウム「眠りの時間学」を開催しました。今回のシンポジウムは森下徹教授（本学教育学部、時間学研究所・兼任所員）、森野正弘准教授（人文学部、時間学研究所・兼任所員）のコーディネートにより、ケンブリッジ大学のブリギッテ・シテータ先生（社会人類学、日本研究・准教授）をお招きし、「電車内での居眠り」という日常実践から生成される時間的・空間的公共秩序の容貌についてご講演いただきました。会は、岡正朗本学学長による開会の挨拶、森下教授による講師の略歴紹介、それからシテータ先生のご講演（演題「電車の中の居眠り：車内空間とジェンダーを考察する」という次第で進められました。公共空間とりわけ電車での仮眠という現代日本社会固有の時間習慣がはらむ社会的意義と機能が、儀礼論・ジェンダー論・フレーム論など文化人類学・社会学的視点から重層的かつあざやかに導出されていくご講演に、参加した約 110 名の聴衆の方々は熱心に聞き入っていました。ご講演の後には、エリザベス・ケニー先生（関西外国語大学・准教授）、ベン・グラフストロム先生（秋田大学・助教）、エムデ・フランツ教授（本学人文学部）、坪郷英彦教授（本学人文学部）、ならびにシテータ先生によるパネルディスカッションが行われました。ディスカッションでは、他の相互不干渉的な公共内実践（電車でのケ

ータイ依存）や他の公共的空間・時間（学校の授業など）での居眠りとの比較可能性、あるいは覚醒・不眠を志向する欧米的でハイ・ブラウ的な価値体系との対照性など、パネリストの専門や経験に即しつつ、睡眠と公共性という問題にまつわる示唆に富む議論がくり広げられました。パネルディスカッション並びに会場から



ブリギッテ・シテータ先生

の質疑応答の終了後、睡眠（仮眠）という視点が時間論とりわけ人文社会科学領域での時間研究にとって含む学術的豊饒性についてシテータ先生から改めて総括いただき、会は盛況のうちに閉じました。



パネルディスカッションの様子

時間学研究所ニュースレター
2015年度第3号をお届け
します。

《時間学研究所》
〒753-8511
山口市吉田 1677-1
TEL/FAX : 083-933-5848
jikann@yamaguchi-u.ac.jp
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



時間学国際セミナー 『眠りの時間学』を開催

平成 27 年 12 月 18 日（金）、山口大学吉田キャンパス総合研究棟・フォーラムスペースにて、時間学国際セミナー「眠りの時間学」が開催されました。同セミナーは翌日の時間学国際シンポジウム「眠りの時間学」と連動したもので、5 名の研究者による研究報告が行われました。「日本社会の眠り」を共通テーマとしつつ、各報告者の専攻にそった報告を行うというスタイルの研究集会で、およそ 30 名の研究者が学内外から参集しました。甲斐昌一 所長（時間学研究所）による開会挨拶の後、森下徹教授（本学教育学部／時間学研究所・兼任所員）による司会進行のもと、次の順序で会は進められました。まず、平安朝前後から近世にいたる睡眠習慣の推移を論じた

報告『『昼寝、一睡、居眠り』睡眠用語からみた近代以前の日本人の生活時間意識』（ブリギッテ・シテェガ先生。ケンブリッジ大学・准教授）。戦国時代から江戸期にかけての神道家の日記を手がかりとして、前近代日本社会での睡眠・夢にまつわる表象ないし実践の特徴群を把握した報告『兼見卿記』と『梵舜日記』における夢と時間』（エ



ブリギッテ・シテェガ先生



エリザベス・ケニー先生

た「幸若舞に基づく室町時代における百姓の「眠り」の習慣と思考の分析」（ベン・グラムストロム先生。秋田大学・助教）。テキスト群の詳細な解読から、漱石文学における「眠り」のモチーフの諸類型とその文学論（史）的布置について、世紀転換期の学知的・思想史的趨勢と関連づけつつ剔抉



ベン・グラムストロム先生

した「夏目漱石文学における眠り：夢・感覚・無意識」（エムテ・フランツ教授。本学人文学部）。そして最後に、平安期の文学作品に見られる「夢告」という



エムテ・フランツ先生

場面から古代人たちにとって外的世界との心的接触の契機として〈夢〉が経験され現象していたことを精緻に跡づけた報告「平安文学における夢告と遊離魂」（森野正弘准教授。本学人文学部）が行われました。各報告後の



森野正弘先生

質疑応答では活発かつ専門的な議論が交わされ、学術的にきわめて実のあるセミナーとなりました。

時間学特別セミナー 『時間経済学—経済学と物理学の狭間で—』を開催

平成 28 年 1 月 25 日（月）、山口大学吉田キャンパス総合研究棟・フォーラムスペースにて、時間学特別セミナー「時間経済学—経済学と物理学の狭間で—」を開催しました。この日は、数日前からの全国的な低気圧の影響で山口宇部空港が閉鎖され、当初予定していた吉川洋先生（東京大学大学院経済学研究科・教授）のご講演がかなわず、高安秀樹先生（ソニーコンピューターサイエンス研究所・シニアリサーチャー／時間学研究所・客員教授）による単独でのセミナーとなりました。経済物理学独立の第一人者である高安先生の最新の研究の講演に参加者一同熱心に聞き入っていました。また、質疑応答の場面ではひとつひとつの質問に丁寧にお答えいただき、大変有意義なセミナーとなりました。



高安秀樹先生



時間学特別セミナー

『世界遺産と社会的記憶』を開催

平成 28 年 2 月 19 日、時間文学・哲学部門での特別セミナーを開催しました（吉田キャンパス総合研究棟）。講師には平田賢明先生（長崎県小値賀町歴史民俗資料館・学芸員）をお迎えし、「地域の歴史・文化的景観が世界的歴史・文化的景観へと変貌するプロセス」と題する講演を行なっていました。「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録運動は、どのような主体によりどのような経緯で進められてきたのか。この運動に対して行政やメディア、地域住民、諸団体がどのようにかわりあい、またそのかわり方はどのようにかわってきたのか。ご講演では、こうした諸点が 19 世紀末から現在に至る長期的視点から精緻に跡づけられるとともに、ローカルな景観が「普遍的価値」に準拠しつつ世界史的な記憶の場へと変貌しつつある現地の状況、並びにこうした景観の意味論的再編が前提する諸要件について詳細かつ分かりやすくご説明いただきました。講演後の質疑応答では、「長崎の教会群」の登録をめぐる諸アクター間の相互作用、長崎という場の地政学的・空間論的特性を含めた分析可能性、キリスト教と（世界遺産が前提する）普遍的価値との相関性、等々、さまざまな視点から活発な討議が行なわれ、会は盛況のうちに閉じました。



平田賢明先生



イタリア国立宇宙物理学研究所から研究員招へい

平成 28 年 2 月 27 日～平成 28 年 3 月 3 日の日程で、イタリア国立宇宙物理学研究所／電波天文研究所のモニカ・オリエンティ博士とフィリップ・ダイヤモンド博士が来所、滞在されました。受入れ教員である藤澤健太教授が取り組んでいる東アジア VLBI 観測網とお二人が研究しているイタリア VLBI 観測網を用いた共同研究の今後について意見が交わされ、研究の発展が見込める有意義な時間となりました。

また、3月2日にはお二人を講師に招き、時間学特別セミナー『高エネルギー観測と高空間分解能で探る巨大ブラックホール噴出流の謎』を開催しました。教職員のほか学生も参加し、海外の最新の研究を聞ける滅多にないチャンスに真剣な表情で向き合っていました。



フィリップ・ダイヤモンド先生



ディスカッションの様子



モニカ・オリエンティ先生



今後の予定

「時間学公開学術シンポジウム2016」開催

下記の要領で時間学公開学術シンポジウム2016を開催します。

詳細が決まり次第、ホームページ等へ掲載します。

日時 : 平成 28 年 6 月 11 日 (土) 15 時 00 分～17 時 00 分 (時間は予定)

会場 : 京都工芸繊維大学 (京都府左京区松ヶ崎橋上町)

講師 : 阿部利洋 先生 (大谷大学文学部・准教授)

外数名を予定。

主催 : 時間学研究所

共催 : 日本時間学会



能の中には派手でダイナミックな作品、例えば「土蜘蛛」や「夜討曾我」、小書き(13段の舞)付きの「融」5)など、いわゆる「動」もあるが、世阿弥の理想とする能は本来「静」であり、長い「静」の時間ほど能に優雅さや幽玄があふれている6)。その一方、場の時間と空間をどのようにまとい、どのように間(マ)やリズムをとるか、いかにして囃子と息を合わせ競い合うかなど強い緊張感が要求され、「静」の能はシテにとって数々の稽古を通して得た型や経験、感が必要である。その技量を読めない見所(観客席)の観客には、「静」は退屈なもので強烈な眠気を誘うことになる(個人的にはこの「静」の情緒と緊張感が好きだが---)。このように過去と現代をどのように挿入し配分するかに始まり、リズムや時間(マ)をどのように取れば幽玄か、感性に響くかなどを研究する分野は時間芸術(芸能)学ともいえ時間学の範疇に入ると考えられる7)。

最後に、僭越ながら能と歌舞伎の鑑賞の難易度について一言。以前話題にしたオペラや歌舞伎を子供でも直ぐに遊べる「将棋」に例えると、能は「囲碁」に相当する。感性のみで鑑賞する能は、最初は分かりにくくとっつきにくい、囲碁と同様、一度慣れ親しむとその奥深さに嵌ってしまう芸術でもある。ぜひ一度、能を時間学の対象として鑑賞してはいかがでしょう。

1)これは世阿弥のとり一つの説を取り上げた。現在では申楽の原形は中国から伝わったとなっている。世阿弥は「風姿花伝」の中では申楽と能の双方の用語を使い分けている。申楽は、能と狂言その他を含み、より広い。明治以後、能と狂言を合わせて「能楽」と総称することとなった。なお太子の作った66面のうちの3面は800年余のちの世阿弥の時代でも手元に現存していたそうである。

2)元雅の能は「藤戸」、「隅田川」、「天鼓」、「経盛」などに代表されるように、あたかも自分の早世を予見していたかのように、子が早逝し親が嘆くという親子愛の作品が多く、子が死なないまでも「唐船」、「弱法師」など親子の情愛を鋭く深く描く詩的な能を作っている。これらの作品の多くは作者不詳もしくは世阿弥作とされていたが、最近の研究によって作風から元雅作と考えられるようになった。元雅はこのように世阿弥の能に強く反目し異なった能の世界を生み出した。それに対し世阿弥は、元雅を父・観阿弥と同様に自分以上の天才であると評価し、その死に悲嘆し能の将来を深く嘆いた。元雅の死後に書かれた伝書「却来花」には元雅が50歳になったら伝えるつもりであった秘曲を公開し、悲嘆の中でも次世代の天才の出現を期待していたようである。

3)音阿弥のパトロンであった将軍義教は、彼を観世大夫にするように世阿弥に要求し拒否された。そこで義教は当時の観世大夫であった元雅を殺したのではないかとされる(急逝したが死因は記録にない)。世阿弥68歳の出来事である。義教は元雅と何らかのわだかまりがあったようで、元雅の能を好んだ後小松法皇にも元雅の御所入り差し止めを進言している。私は、楠木正成の一族であることを強く意識する元雅を、まさに南北朝の融和が破れた時期の将軍であった義教が危険人物と見なしたのではないかと考えている(元雅は南朝方に付いたのかもしれない)。その影響で、注2)で述べたように、音阿弥以後は幕府をおもんばかって元雅作の能を敢えて廃曲あるいは作者不詳や世阿弥作としたのではないかと推測している。

4)「芝居」は「能」あるいは「能を見る」を意味する言葉。つまり能は、本来、屋外で演じられ、観客は芝の中に居た。

5)曾我物語を題材にした「夜討曾我」小書き付(十番斬)はダイナミックな殺陣が入り、全く能らしくない。また「融」(典拠は伊勢物語)は源融が主人公だが、この能は世阿弥にとって華やかであった義満との思い出を重ね合わせて作られたと思われ、私には栄枯盛衰と諸行無常のはかなさを感じる。なお小書きが付くとダイナミックになる。「土蜘蛛」は能では平家物語を出典にした源頼光の化け物退治であるが、風土記や日本書紀では天皇に反抗する異民族の首領として登場する。

6)「静」の能は鬘能に代表される。なかでも個人的には伊勢物語の歌を題材にした「井筒」が好きである。幼馴染の夫婦の愛と妻の思いに、なんとも言えないやるせなさを感じる。

7)話が飛ぶが、最近のオペラの演出は経費削減意識が強く、大道具や衣装の節約のため場面設定を現代にすることが多い(読み替え演出)。ところが最近NHK-BSで放映された2014年のザルツブルク音楽祭のネットレブコ、ドミンゴの出演したヴェルディの「イル・トロヴァトーレ」(演出アルピス・ヘルマニス)の読み替えは少し違った。場面が次元(時間と空間)を超えて、瞬時に現代(図書館)と数百年前の過去を行き来する、まるで能のような演出であった。私はこの演出家は能を参考にしたと推測している。